

「ハノイ国家大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学法学部 4年 加藤 菫子

1. プログラム内容

本サマースクールプログラムは、主に四つの要素によって構成されていた。ベトナム語・文化講座、学外における研修、日本語・日本文化を学ぶ現地の学生との交流、そして日越相互の学生による発表とディスカッションの四つである。基本的なスケジュールは、午前は京都大学・ベトナム国家大学ハノイ共同事務所にて新江利彦所長の講義を受け、午後からはハノイ国家大学外国語大学や英才高等学校での日本語の授業に参加するというものだった。学外研修においては、外国語大学の学生と共にハノイの旧市街や郊外のバッチャンに赴き、ハノイ、そしてベトナムの歴史や文化を学んだ。週の最後には発表・交流会が行われ、一週目は人文社会科学大学、二週目は外国語大学で日越双方の学生が発表を行い、文化の違いについてのディスカッションを行った。

2. 現地での経験

最初の一週間は驚きの連続であった。まず驚いたのは、ベトナムの無秩序な交通事情である。日本では考えられないほどの数の二輪車が路上を走っており、車線という概念を無視して四輪車の間をすり抜けていく。また、信号機のない横断歩道が多く、歩行者は車の間を縫うようにして道路を渡らなければならない。宿泊していたホテルから大学への通学路にもこのような横断歩道があり、最初はあまりに怖くて足が竦んでしまった。

ホテルの近くには、開業してから一年ほどしか経っていない綺麗で大きなショッピングモールがあるのだが、そのすぐ横には庶民的な市場や粗末な作りの店や屋台が並んでいた。また、歩道に大きな穴が開いていたり、工事が中断された歩道橋の土台がそのまま残っていたりと、歩道や道路の整備不良が目立っていた。上記の交通事情を含め、このような情景は、ベトナムの著しい発展とその課題の象徴として、強く印象付けられた。

しかし、一番驚いたのは、大学における女子学生の比率である。大学のキャンパス内は女子学生で溢れかえっており、男子学生を見ることは稀であった。外国語大学の授業にも幾度か参加したが、男子学生がクラスに1人もいないという状況も珍しくはなかった。また、教鞭を取る教師や教授もその圧倒的多数が女性であり、ベトナムでの女性の社会進出が日本以上に進んでいることを肌で感じた。

こういった数々の驚き以上に感銘を受けたのは、ベトナム人の人懐っこさと優しさであった。私たちが関わった現地の学生が特別日本に興味を持っている学生であったことも関係しているかもしれないが、授業や交流会を通して出会った学生の多くは、右も左もわからない私たちを食事や観光に誘い、いろいろな場所へ案内してくれた。彼らのおかげでこの研修はより充実したものとなった。また、私たちが関わった多くの学生は、私たち日本人と交流できる数少ないチャンスを活かそうと、日本語や日本文化たくさんの質問をぶつけてきた。こういった積極性には目を見張るものがあった。また、彼らとの会話を通して、ベトナムについて知るだけでなく、私自身日本語や日本文化について考えさせられたことも、良い経験であったと感じている。

3. 学習成果

異文化理解には積極性が重要であることは、本プログラムに参加する前から理解していたつもりであったが、今回の研修で私はそれを本当に身に染みて感じる事ができた。それは、現地の学生の日本語・日本文化を少しでもより深く理解しようとする意志と努力をこの目で見たからである。学生からの質問の中には、時に答えるのに戸惑ってしまうほど難しいものもあった。特に外国語大学の交流会で、日本人の「本音と建前」について批判的な意見を交えた質問を投げかけられた時には、一時答えに窮してしまった。しかし、このような批判的な視点と臆せず素直な疑問をぶつける積極性こそ、異文化理解に真に必要なものではないか。このような気づきを得て、またそれを実践する機会を得たことこそ、本プログラムから得ることができた最大の収穫であると感じている。

4. 進路への影響

私は既に就職活動を終え、進路を決めているが、本プログラムにおける経験が私の将来に与える影響は大きいと考えている。それは、海外で働いてみたいという私の漠然とした思いを異文化体験の中で再確認することができただけでなく、より強固な決意へと昇華することができたからである。プログラム二日目に大学での日本語スピーチコンテストを観覧したが、ファイナリストの多くがベトナムのさらなる発展と成熟のために力を尽くしたいという思いを力強く表現する姿は感慨深かった。私は卒業後、アジアの新興国での新規顧客開拓にも力を入れている企業に就職する予定だが、現地へ赴き、そこで働くことによって、ベトナムのような新興国の発展に何らかの形で関わっていきたいと思っている。